The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Association between maternal Autism Spectrum Quotient scores and the tendency to see pragmatic impairments as a problem
Author(s)	英, 香里
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73442
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　英　香里　）	
論文題名	Association between maternal Autism Spectrum Quotient scores and the tendency to see pragmatic impairments as a problem （母親の AQ スコアと子どもの語用障害を問題とみる傾向の関連性）

論文内容の要旨

【背景】語用障害には、冗談や皮肉、比喩、間接発話の理解の失敗、会話の話者交代や質問応答の困難など多様な症状があり、語用障害があるとコミュニケーションが難しくなると考えられている。同時に、コミュニケーションは相互作用であることから、受け手によってはコミュニケーションに困難が生じないということもあると考えられる。Komeda et al.(2015)は、自閉症スペクトラム障害と定型発達のどちらにおいても、自分と似ている相手に対して選択的な神経反応を示すことを示唆している。綾屋（2010）は、自身が成人後にアスペルガー症候群と診断され自助グループに参加したときの体験について、コミュニケーション障害があると言われる者同士で「何の問題もなくコミュニケーションが成立している」と述べている。そこで、自閉傾向の高い人は語用障害に対して寛容なのではないかと考えた。

【目的】母親の自閉症スペクトラム指数（AQ）と、子どもの想定された語用障害に対する評価（Maternal Evaluation of Pragmatic Impairments in Children ： MEPC)との関連について検討した。MEPCには、子どものコミュニケーションチェックリスト第2版（CCC－2）を用いた。槻舘ら（2015）はCCC-2日本版の標準化にあたり、年齢が高くなるほどコミュニケーションの問題は減少すること、年齢が高くなるほど問題点はより大きく、良好な点は小さく見積もられること、また女児のほうが男児より言語及び語用能力が高かったことを報告している。そこで、子どもの年齢と性別が、母親のAQとMEPCとの関連に影響を及ぼすかどうかについても副次的に検討した。

【方法】アンケート調査会社を通じ、小学生をもつ母親 100 人を対象に、子どもの性別および学齢（小学 1～6 年）につきそれぞれ 8-9 人の母親をサンプル割付けし、無作為抽出した。MEPC では、CCC-2 から語用障害に該当する、D（首尾一貫性）、E（場面に不適切な話し方）、F（定型化されたことば）、G（文脈の利用）とH（非言語的コミュニケーション）の５領域 25 項目を抜粋し、各項目について、「もし自分の小学生の子どもがそれぞれ項目にあるコミュニケーション行動をとった場合、どの程度問題であると感じるか」について、「1. 問題ではない」から「5. 問題である」の５段階で評価してもらった。同時に、評価した母親自身の AQ を測定した。

【結果】母親の AQ 得点と MEPC 得点との間に有意な負の相関（r =-0.26, p < 0.01）を認めた。また AQ と MEPC の各下位尺度間で偏相関を求めたが、下位尺度間に有意な相関は見られなかった。
　副次的に検討した、想定された子どもの年齢と性別による、母親の AQ と MEPC の相関への有意な影響は見られなかったが、n を増やしての検討の必要性が示唆された。

【考察】ＡＱの高い母親ほど、子どもの想定された語用障害を問題ではないと評価する傾向があった。その理由には多様な可能性が考えられるものの、本研究結果は臨床場面で親の特性を考慮したサポートへの応用に有用である。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　英　香里　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	小坂　浩隆
	副 査	教授	三邉　義雄
	副 査	教授	中川　彰子

論文審査の結果の要旨

自閉症スペクトラム症（ASD）では、言葉に遅れがない人でも語用障害がみられると言われており、語用障害がASDの人のコミュニケーションないし社会参加を阻む主要因の一つとなっている。

本研究では、コミュニケーションは双方向であり、語用論は共同行動の一形態（Clark,1996）で、それらの障害である語用障害は、個人の認知処理機能の特異性とともに相手との関係の中で創発されるものである(Perkins, 2005, 大井,2004) という観点から、どのような相手とであれば語用障害が軽減されるかについて、相手の自閉傾向の強さとの関連性に着目し探索的に行われたものである。

調査方法は、「子どものコミュニケーションチェックリスト第2版（CCC－2）日本語版」より語用障害に関わる項目を抜粋し、小学生をもつ一般の母親を対象に、自分の小学生の子どもにこれらのコミュニケーション行動があると仮定し、それがどの程度問題であると感じるかについて、「1. 問題ではない」から「5. 問題である」の5段階で回答を求めた。これを「子どもの想定された語用障害に対する評価」（Maternal Evaluation of Pragmatic Impairments in Children : MEPC） とし、同時に母親の自閉症スペクトラム指数（AQ）を測定し、MEPCとの相関をみた。その結果、MEPCと母親のAQとの間に有意な負の相関（r =-0.26, p < 0.01）がみられ、AQの高い母親ほど子どもの語用障害を小さく見積もるという傾向を示した。副次的に検討した、想定された子どもの年齢と性別による、母親のAQとMEPCの相関については有意傾向の負の相関を示し、nを増やしての検討の必要性が示唆された。

本研究の結果は、臨床場面において親の特性や子どもに対する理解度を考慮したサポートや語用障害を軽減する関わり方への示唆が得られたことに加え、配偶者のAQとMEPCとの関連、対象を父親とすること、評価バッテリーに「コミュニケーションチェックリスト成人用」を用いて成人の友人・職場関係について研究すること、といったさらなる研究につながるものである。一般の人を対象に、他者の障害に対する評価を求めたという点で独創的であり、健全な方法と適切な統計処理に基づき結果が導かれていることから、当研究科の学位論文として認められると判定した。